

共催：ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

Hybrid装置導入による検査室Insightの発見と改善効果による検査室の効率化

小山 真史

JA長野厚生連佐久医療センター 臨床検査科

検体検査では精確かつ迅速な検査結果が常に求められ、ルーチン業務では分析装置の保守・精度管理とTAT (Turn around time) 管理が責務である。当院においては、患者数、検査項目数、検査件数が増加する一方で、生化学・免疫部門の検査体制は現状維持のままであったため、「検査工程」「装置管理」「TAT」に課題を抱えていた。限られたマンパワーで臨床へ最大限に貢献するために業務の省力化は必須であった。

2014年の開院当初から運用していた生化学・免疫分析装置の老朽化に伴い機器更新を迎えたため、部門のメンバーで話し合い、どの時間帯でも誰が検査を担当してもその日の検査の質が左右されない運用の構築を目標に、課題を整理して機器更新へと臨んだ。また、従来の課題は運用面で改善できるようメーカーと協働して運用方針を決めた。

従来の3社5台を使用した機器単独運用から生化学免疫統合型自動分析装置cobas8000/702/801(ロシュ・ダイアグノスティックス社)2式によるHybrid装置へ機器更新を行い、安定した検査体制の構築と効率的な検査工程を設計した。

この機器更新が業務改善の契機となったので、その経緯とHybrid装置導入による検査室の効率化について発表を行う。

RDA・CCMと連携したコバスシステムの使用経験

吉田 隣生

社会福祉法人聖隷福祉事業団総合病院聖隷三方原病院 臨床検査部

当院は、浜松市西部に位置し、静岡県下最大級の病床数を有する総合病院である。ドクターヘリに代表される超急性期医療だけでなく、結核・ホスピス・重症心身障害などにも力を入れる地域医療支援病院である。

分析検査室では、500 - 700件/日の院内検体に加え、グループ施設である予防検診センターや健康診断センターの健診検体1000-1500件/日を測定している。少ない人手で多くの検体を処理すること、装置メンテナンスや試薬補充に費やす時間が膨大であること、検体処理工程において、手作業・手搬送による検体落下・紛失・コンタミ・暴露等のリスクが大きいことなどが課題となっていた。また、2023年8月にISO15189を受審したが、受審を検討する中で、従来のシステムではQMSの維持が困難であることも予想されていた。

そこで、業務効率化・検査の質向上を目指し、2023年3月にロシュダイアグノスティックス社製の生化学免疫分析装置「cobas8000」、前処理装置「cobas p471/p612」、冷蔵ユニット「cobas p501」、搬送ライン「CCM」を導入した。本演題では、今回導入されたシステムによる検査業務効率化の成果と臨床検査部における運用変更や新たな取り組み、今後のビジョンについて紹介する。